

文語の苑

メールマガジン第三号

貧弱なる日本語の音韻構造

愛甲次郎

成 cheng 2、誠 cheng 2、
濟 ji 4、際 ji 4、
精 jing 1、井 jing 3、静 jing 4
淒 qi 1、棲 qi 1、齊 qi 2、砌 qi 4
青 qing 1、清 qing 1、情 qing 2、晴 qing 2、請 qing 4
生 sheng 1、声 sheng 1、省 sheng 3、盛 sheng 4、聖 sheng 4
逝 shi 4、世 shi 4、勢 shi 4、誓 shi 4
說 shuo 1
歲 sui 4
西 xi 1、
星 xing 1、腥 xing 1、醒 xing 3、姓 xing 4、性 xing 4
睜 zheng 1、征 zheng 1、政 zheng 4、整 zheng 4
制 zhi 4、製 zhi 4

右の図は何だと思えますか。これは日本で「せい」と発音される漢字の表です。

それが中国語でどのように発音されるかをアルファベットで示しています。数字は一声から四声までアクセントを表しています。これから明らかのように日本人の耳には同じ「せい」としか聞えない四十近い文字が中国人の耳には（アクセントまで考慮すれば）別々の音に聞えるのです。

この表は日本人の耳の悪さを端的に示しています。ところで日本は漢字を導入し、漢字を使って表される語彙は日本語の重要な要素になっています。日本人の耳の悪さのせいで同音異義の単語が氾濫しています。どうしても耳で聞き分けられず、目で確かめることになりました。その結果自分ではあまり気づいていないのですが、日本の文化は非常に視覚型になっています。

私が日本語において文章語の重要性を強調する一つに理由はここにあります。漢字を取り入れた日本文化の壮大さは貧弱な日本語の音韻構造は支えきれないので、書かれたものを読むことによって支えるしかありません。漢字制限に狂奔した当時の文教政策担当者はこのような視点を理解していたでしょうか。

平成二十三年八月

文語の苑

メールマガジン第三号

小倉百人一首 三 天智天皇

秋の田のかりほの庵のとまをあらみ わが衣手は露にぬれつつ

百人一首の最初に掲げられたこの歌は、古今集の次の第二の勅撰和歌集、後撰集に天智天皇のお歌として採録されてお（を）ります。ただ残念ながらこの歌は、藤原定家の時代と比べて格段に進んだ現代の、万葉集時代の歌の研究から見ますと、どう見ても天智天皇のお歌とは思は（わ）れませぬ。

この歌の表面の意味は、秋の田で稲刈りをした穂を入れた仮小屋の、屋根を葺いた苦が粗いので、夜露が降りて、そこに寝てゐ（い）る私の衣の袖が露に濡れそぼちました、といふ（う）ものです。苦とは、菅や茅などの草を編んで小屋や舟などの上を覆ったり、周囲に立掛けたりして、雨風を防いだもので、苦屋とか苦舟とかの言葉があります。

ただこの歌は表面の意味だけではなく、その裏に、あなたは私に飽きてしまつて、おいでになるのが間遠になり、私の衣の袖は涙に濡れてゐ（い）ます、といふ（う）意味が隠されてを（お）ります。その上「かりほ」といふ（う）言葉には、「刈り穂」と「仮庵」の二つの意味が掛けてある。このや（よ）うな難解で、複雑な構成の歌を、万葉集初期の時代の天智天皇がお詠みになつたはずはありません。

後撰集の時代は、紫式部、清少納言等の宮仕へ（え）の才女たちが、仮名文字を駆使して、日本最高峰の文学を遺した平安時代の盛期ですが、当時はまだ、万葉集の歌はよく知られてを（お）りませぬ。後撰集の撰者たちが、内裏の中の梨壺という所に集まつて、漸く万葉集の解読を始めたのがこの時期です。ですから当時天智天皇のお歌として、世に伝は（わ）つてゐ（い）たこの歌が、後撰集に採録されたのは、已むを得ないことでした。それを藤原定家が百人一首に取上げました。

ただ定家には天智天皇が、定家の属する藤原氏の祖先の鎌足と共に、大化改新を成遂げられ、百済再建のために派遣した水軍が白村江で敗れた後、国の防衛体制を固められて、律令国家としての日本の基礎をお築きになつた偉大な天皇として、意識されてゐ（い）たに違ひ（い）ありません。だからこそ天智天皇のお歌を、百人一首の冒頭に置いたのでせ（しよ）う（う）。

天智天皇のお歌として一首選ぶとしたら、万葉集に次の秀歌があります。

わだつみの豊旗雲に入り日さし 今夜の月夜さやけかりこそ

最後の万葉仮名の「清明己曾」の四文字は、古来さまざまな読み方がなされてゐ（い）ますが、ここでは森本治吉博士の読みに従ひ（い）ます。

文語の苑

メールマガジン第三号

文語歌曲「故郷の空」(明治翻譯唱歌)

「唱歌」は竹取物語にも出てくる古い言葉で、「シヤウガ」と呼ばれてきました。楽器の旋律に合わせて口で歌ふことを指して、明治まで使はれてきました。十九世紀に英米の宣教師達が東洋に押し寄せ、讚美歌や聖歌を尖兵として教育に大きな力をふるひ、東洋をキリスト教化して自分達の勢力圏に組入れていった歴史があります。唯一の例外が日本で、明治に入つて讚美歌も歌はれるやうになりましたが、一方、それに對抗してシヤウガをシヤウカと訓み代へ、日本独自の歌唱を作る方向をとりました。東洋の他の國は讚美歌の影響を強く受けただけで、自分の國の唱歌といったものはほとんど作られませんでした。日本の場合、自國の音楽を学校教育の中心にすゑて普及させ、幕藩体制から脱皮した日本の國民であることを自覚させようとなりました。一葉のたけくらべにも「本家本元の唱歌だなんて威張りおる正太郎を取ちめて呉れないか」などとあつて、公立の学校で唱歌がさかんにとりあげられている事情が知られます。

唱歌の数がすくなかつたから当然でせうが、明治の初期には欧米の歌を採り上げ、それの焼直しが多かつたのも已むを得ないことでした。「翻譯唱歌」などと呼ばれてゐますが実際にほとんどが替歌です。坂本九ちゃんの「上を向いて歩かう」が米國では「Suki-yaki Song」に化けて大流行したことに似てゐますが、日本では格調高い文語調の歌詞がほとんどです。明治初めの唱歌「故郷の空」といふ曲がそのやうな翻案の典型といへませう。

夕空はれて あきかせふき つきかげ落ちて 鈴虫なく

おもへば遠し故郷のそら ああ わが父母 いかにおはす

すみゆく水に 秋萩たれ 玉なす露は すすきにみつ

おもへば似たり 故郷の野辺 ああ わが兄弟(はらから) たれと遊ぶ

これはスコットランド民謡からとつたもので、原詩の題はComing Thro, The Rye、「ライ麦畑を通りすぎたら」です。丈の高いライ麦畑で「誰かさんが誰かさんに会つてたつて／誰かさんが誰かさんに接吻してたからつて」といった調子の歌です。これも故郷の一風景かも知れませんが、「故郷の空」からは想像もつかない情景です。

*「遠し」は文語の形容詞です。今は「し・s・i」の「s」が落ちて、「遠い」になりました。

*「わが父母いかにおはす」の「おはす」は、「居る」の尊敬語、「どつしていらつしやるだらう」前の「故郷」の「如何にいます父母」と同じ発想のことばですね。

*「すすきにみつ」の「みつ」は「満つ」、今では「満ちる」となります。

*「はらから」は、最初は同母の、後ただ「兄弟姉妹」のことを指し、後同じ國民、同胞といった意味に広がりました。

文語の苑

メールマガジン第三号

雷 愛國百人一首を讀む(一) 市川 浩 (平成二十三年八月二十九日)

皇は神にしませば天雲の雷の上に庵せるかも

柿本人麻呂

まづ最初の「皇は神にしませば」の「し」と最後の「ば」に注目します。人麻呂と殆ど同時代の有馬皇子が謀反の罪に問はれて連行される時の歌家であれば筈に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る「にある」「し」と「ば」と同構文で、此を見ますと、旅でありますので、飯は筈でなく、椎の葉に盛っていたとくのです、つまり旅では飯を筈に盛るのは普通できませんよねといふ氣持を現してゐます。この氣持で起句を讀み返すと大君は神でいらつしやいますよね、となります。即ち當時の人々が神統を嗣いでいらつしやる大君を神であると、誰に強制された譯でもなく信じてゐたことが前提となつてゐるのです。

次の「天雲の雷の上」で「天雲」は神の乗り給ふ天上の雲といふ意味と同時に雷を落す「雨雲」でもあります。唱歌「富士の山」に、「雷様を下に聞く」とその高さを讃へる一節があります。正に雲は雷の上にあるのです。また同時に「雷の上」は最後の「庵せるかも」の「庵」即ち大君の假御所となつた場所を指し、現在の奈良縣高市郡明日香村にある「雷の丘」に中ります。ここはその名の如く雷がよく落ちる所なのでせう。そんな所へ大君(持統天皇)が行在所を御造りになつたのだが、天皇は神様で雷の上においてになるから大丈夫だと思ひますよ。最後の「かも」は詠歎と願望、更に疑問の交りあつた終助詞です。ここでは天皇が雷の丘に御幸、御滞在なさる場所での落雷への懸念と、それでも雷は遠慮して落ちないで欲しいといふ素直な敬愛の氣持が表はれてゐます。作者の柿本人麻呂は別に、近江遷都の際永年の都大和を去ることへの天智天皇の御思ひのほどを歌つてゐますが、ここでも素直な敬愛の氣持が讀み取れます。

さて此の歌は萬葉集卷三にあります。愛國百人一首の冒頭をも飾つてゐます。愛國百人一首は先の大戦中の昭和十七年に完成した歌集ですが、戦中でもあり何か戰意昂揚を目的とした、文學的には必ずしも評價が高くないイメージがあり、特に戦後は殆ど全く顧みられませんでした。それが發刊後五十九年の平成十三年、私は此の歌集の解説本の翻刻に版下制作を擔當することとなり、その素晴らしい歌歌に觸れ大きな感銘を受けました。撰者は佐々木信綱、齋藤茂吉、窪田空穂、折口信夫(釋迢空)、尾上柴舟、太田水穂、川田順、吉植庄亮、齋藤瀏、土屋文明、松村英一、北原白秋といふ昭和の代表的歌人十二人、選ばれた歌の内譯は室町時代までの上中古から四十九首、江戸時代五十一首で、小倉百人一首にも優るとも劣らぬ内容です。此の中の幾つかを御紹介しながら、昭和の歌人たちが考へた「愛國」とはどんなものかに就いて知つていたとくと共に、今日の「愛國」はどうあるべきかにも思ひを馳せていたゞければ幸ひです。